

### 第3章 鎌倉時代～室町・戦国時代

鎌倉時代の歴史的事件としては、文永・弘安の役と呼ばれる元寇げんこうがあります。

鎌倉幕府は、1271年に、南薩地方の地頭であった二階堂行久に対し、元（蒙古）の侵入に備えるよう命じています。これは、蒙古に備える最も早い例で、幕府が坊津や南薩海岸を重視していたことがわかります。

枕崎は、以前は「鹿籠かご」と呼ばれていましたが、「鹿籠」という地名が初めて文書に表れるのは、1306年のことです。千竈ちかまもんじよ文書と呼ばれるものに「かこのむら」と出てきます。また、1359年に、島津家の5代当主だった島津貞久が「七ヶ条の置文おきぐみ（書き置き）」を残していますが、子どもこどもの一人に「薩摩国山門院三か村ならびに脇本村および、同国河辺郡内嘉古村」を与えられています。嘉古かこ Ⅱ 鹿籠かご」です。

この頃には、一つの村を形成していたことがわかります。但し、「河辺郡」の一部ではあっても、あまり開けておらず、地域の区域も明確ではありませんでした。

鹿籠という地名は約700年、枕崎という地名は約300年ということです。

鹿籠という地名の由来については、1795年の『げい麗藩名勝考』げい麗藩とは鹿兒島藩のこと」という本には、鹿籠の由来について、籠むすのことで、竹で編んだ小舟が基になった」旨のことが書かれています。写真は、今も南方で使われている籠舟です。

枕崎に残る言い伝えでは、山幸彦が竜宮城に行った神話があります。『日本書紀』という本には、その時の船がまなしかつま無目籠」と書かれています。目が無いほど堅く編んだ隙間のない籠舟むすのことともいわれます。山幸彦は、なくした釣り針を探すため、国分八幡 現在の鹿兒島神宮むすのカゴヤマから発し、最初に着いた海岸が鹿籠の海岸で、到着した一帯の地名を、山幸彦の別名にちな因んで 穴の神むすにしたということでした。

島津家9代当主の島津忠国は、晩年になって、子どもむすの10代当主立久と対立したため、1459年に、鹿兒島から加世田別府 坊泊むすに移り住んでいます。

この頃の「鹿籠」は、坊津とともに加世田別府半分と呼ばれていました。



坊泊に移った理由として、次の2点が考えられています。

① この地方が最も安全な場所であったこと。

② 海外貿易上、特に重要な輸出品である硫黄の積出港であったこと。

室町幕府は、当時の中国「明」と貿易を行っていましたが、難しくは勘合貿易といいますが、日本からの重要な輸出品の一つが硫黄でした。1468年には、島津氏は幕府に硫黄1万斤（1斤＝約600g）を売っています。また、「明」に向かう船が坊津に立ち寄った際には、硫黄を積み込むことも命じています。

坊津は当時の重要な港であり、硫黄の産地が硫黄島でした。

そのような中で、硫黄島からの硫黄が「鹿籠小湊の硫黄崎」に運び込まれたこともあったと予想されています。

このように、「鹿籠」という地名が表れたり、硫黄の積み込みが予想されたりしますが、室町時代（1336～1573）の頃までは、「鹿籠」「枕崎」は、まだ人口も少なく、豪族が根拠地を構えて近くを支配するほどには発展していませんでした。

この時代の「鹿籠」は、あくまでも主要貿易港の坊津周辺の一地域であり、坊津から阿多・加世田・川辺に通じる途中場所に過ぎませんでした。

但し、「鹿籠」には2つの重要な役割がありました。1つは前述した硫黄島からの硫黄の件で、もう1つは、鹿籠が、川辺・加世田などの山地への塩の供給地だったことです。「鹿籠名数記」には、湊に二浦あり。枕崎浦・白沢津浦なり。並塩屋八村あり。」とあります。海岸は白砂の続く入り江、花渡川下流は広い砂地、そして周囲には薪まきの材料となる木材の豊富な山々で、塩の産地となっていたのです。

島津氏に、「薩州家」と呼ばれる一族があります。もともとは出水を治めていましたが、島津国久の時、15世紀中頃に加世田に移りました。国久は、四男の秀久に鹿籠を治めさせました。秀久は、鹿籠の桜之城（今の桜山小の場所）で、鹿籠や坊泊を支配しました。

「薩州家」は、秀久の孫の代に吉利に移されますが、代わりに南薩地方を治めるのが、ひろは歌」で有名な島津にっしんさい日新齊忠良です。

鹿籠を治めたのは、忠良の三男尚久（1562年没）です。尚久は、桜之城にいて、久志・秋目・坊泊・鹿籠を支配したのです。尚久は、兄貴久の三州（薩摩・大隅・日向）統一をサポートしました。尚久の子の忠長も島津本家をサポートしますが、1578年に、大隅の串良に移りました。

1570年頃には、川辺の地は知覧・加世田・川辺・鹿籠の4か郷に地頭をおき、各政令が布かれています。

最後に、「倭寇」について、ふれておきます。倭寇というと、単に悪者の海賊というイメージがありますが、ちよつと違うのです。この時代の南薩地方の最も特徴的なものといえます。

倭寇という言葉は、鎌倉時代末期から室町時代に、朝鮮半島や中国大陸沿岸を襲った海賊に対する朝鮮・中国側の呼び名」です。但し、時代と地域によって、その意味する内容は多様で、倭寇を連続した歴史事象としてとらえることは不可能」(『日本史大事典』)です。倭寇といっても真倭と呼ばれる日本人は1〜2割で、大部分は中国人でした。

倭寇を理解するためには、中国を中心とする東アジアの貿易の仕組みを知らなければなりません。当時、中国は「冊封」といって、自分が認めた国と認めた量(回数)だけの交易(つきあい)をしていました(10ページ参照)。勘合符という渡航許可証を与えていました。

認めた国から定期的に品物を受け取り「進貢・朝貢」、その代わりにそれ以上の品物を与えた(回賜)のです。日本は10年に1回ぐらいの割合でした。「冊封」を認められない国の船の国内入港や中国人の海外渡航・私貿易を禁止(海禁)していました。

船があるからといって、勝手に貿易をすることはできませんでした。公的には、実質的に鎖国状態といってもよい程です。

坊津を中心とする南薩地方は、遣唐使の頃から海外交通の要地でした。

鎌倉時代は、「元寇」に備えて警備を厳しくしますが、来襲がないとわかると、逆に「海」や「朝鮮・大陸」に進出しました。南北朝時代になると、勢力の衰えた南朝側が海上交通を重視したため、海運も発達してきました。

このような海外進出で、まず朝鮮との交通及び交易をしようとし、中心となったのが西九州の肥前。今の長崎や熊本）や薩摩の人々でした。

坊津を中心とした南部の倭寇は、坊・鹿籠・川辺・加世田などの人が多く、刀剣や硫黄などを積んで交易（「明」が正式に認めた交易ではないので、正確には私貿易となります。）に出かけました。普通には商船として交易もしましたが、前述の制約もあったり、「明」の政府が私貿易地を攻撃したりすると、トラブルになり、時には荒っぽいこともしたのです。

薩摩における倭寇のリーダーが、島津氏の当主（殿様）だったのです。

倭寇は、薩摩で言えば、島津氏が海外との交易で利益を上げようとしていた海外活動だったので

す。

なお、島津氏は1374年に、「明」と「冊封」関係を結ぼうとしましたが、認められなかったこともあります。

倭寇の大陸へのコースは、五島列島↓朝鮮↓中国と、坊津↓琉球（沖縄）↓中国への2コースでした。薩摩の倭寇たちのコースは後者で、盛んな時代には今のフィリピンや東南アジアまで進出していました。

当時の琉球（沖縄）は、琉球王国という1つの国でした。勘合貿易も日本は10年に1回ぐらいでしたが、琉球王国は1〜2年に1回の割合でした。南海産物入手する窓口として重視されていたのです。その関係で、琉球への途中にある薩摩や坊津も重要でした。

写真は『三國名勝図会』に描かれた坊津です。

その後、ヨーロッパの東洋進出や国内統一をした豊臣秀吉の禁止命令で、衰えていきました。

但し、豊臣秀吉が、鹿籠の城主に、倭寇が「明」の辺境を侵すことを禁じた命令もあることから、



少しは残っていたことがわかります。

なお、日本においては、貨幣経済の進展が見られるようになる頃でした。自分の国の通貨を持たず、もっぱら明銭に頼っていたので、「明」との交易は、絶対に必要だった一面もありました。

また、16〜17世紀に西洋人が最もほしがっていた品は、樟脳でした。これはほとんどが薩摩産であり、鹿籠の花渡川沿岸は、産地の一つでした。